

学生が行く！土木のお仕事

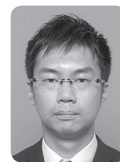
第5回 人物編 + a

ヒトから学ぶ「幅広い土木のお仕事」

蛭間 芳樹氏 (株)日本政策投資銀行 環境・CSR部 BCM 格付主幹

金融力で災害に強い 日本社会をデザインします

〔執筆者〕三室 碧人、篠崎 真澄 学生編集委員



HIRUMA Yoshiki

83年埼玉県生まれ。09年東京大学大学院工学系研究科社会基盤学修了後、日本政策投資銀行入行、11年から現職。その他東京大学生産技術研究所 協力研究員、世界経済フォーラム リスク・レスポンス・ネットワーク パートナー等。専門は都市災害軽減工学、リスク/クライシス・ファイナンス。

「金融も土木の仕事」と語る(株)日本政策投資銀行(DBJ)の蛭間芳樹さん。一見、土木とは無関係に見える金融業界だが、蛭間さんいわく「私はCivil Engineerです。市民が安全で安



写真1 蛭間氏(写真中央)

心で快適な生活を送るために要素技術を組み合わせて設計・実現する土木技術者の特性は金融業界にも通じます。金融も社会技術の一つです」と語られた。人生の転機は新潟県中越地震。当時大学3年生で、少年時代に毎年サッカーの夏合宿で訪れていた中越地方が被災し、心配で居ても立ってもいられず、当日の深夜には友人と現地に駆けつけた。講義で学んだ安全なはずの社会基盤施設が簡単に破壊される現状を目の当たりにし、同学問を専攻する一人の人間として無力感を覚えたという。帰京後、都市防災の研究室(東大生研・目黒公郎研究室)にて猛勉強をするなかで、「防災関連対策がコスト

とみなされ先送りされる現状」に気づく。そこで、「社会の防災・事業継続対策や危機管理の事前投資を促すための制度設計、すなわちお金の流れをデザインできる人間になろう」と決意。DBJを選んだ理由は、官公庁や民間企業の両方から情報が集約される立場と独自の政策金融という組織機能に強みがあるからだからと語る。しかし、DBJは日本の金融を先導する投融資の最先端。「防災×金融」の実現という熱意とは裏腹に、新人配属は通常の投融資業務だった。事態が一転したのは東日本大震災。震災以前から防災格付という商品が存在していたが、実績に乏しく取扱中止が検討され

ている最中であった。蛭間さんは他部署に所属するにもかかわらず役員に直談判し、「商品の廃止はDBJの経営の観点から合理的ですが、日本社会には不可欠、かつ金融機関が課題解決へ貢献する責任もあります」と迫り、入行2年目の若手が半年の検討猶予期間を取り付け、ゼロから商品刷新を担当した。「金融力で防ぎ得た死や防ぎ得た損失をゼロにしたい」の哲学をもとに独自の現地調査も実施し、世界初の金融商品「DBJ BCM 格付」が生み出された。「防災対策は単なるコストではなく企業価値や有事の競争力の源泉である」という新しい社会の価値観を掲げ、現在も全国を飛び回り、現場を見て、企業経営者の本音を聞いて具体策を提案する日々を送られている。蛭間さんの将来の夢は、「災害大国日本から生み出されたBCM格付融資が展開し、グローバル・リスクに対する被害抑止力の向上に具体的に貢献し、世界中から尊敬・信頼される日本を創ること」と力説される。学生の皆さんへは、「不確実想定外の時代には、既存の知識や経験値が一般解になるとは限らない。小さくまとまるな」と、語られた。

神保和徳氏（国際石油開発帝石（株））

天然ガスパイプラインで日本のエネルギーを支える

「執筆者」三宅翔太、三宅碧人 学生編集委員

土木といえば、ダムや橋梁を連想しがちだが、天然ガスパイプライン建設も土木プロジェクトそのものだ。都市ガスの原料となる天然ガスを供給するパイプラインは生活に必要不可欠であ

ることに違いはないが、どのような負担を持って仕事に携わっているのだろうか。国内最大のエネルギー開発企業である国際石油開発帝石（以下、INPEX）で、パイプライン建設に携わる神保和徳さんに聞いた。

INPEXは、電力・ガス等の源である石油・天然ガスの地質調査・探鉱・開発・生産・販売を行う民間企業である。神保さんは入社後、石油・天然ガスを採掘する部署を経て、各地のパイプライン建設に35年以上携わってきた。

「パイプラインがダムや橋梁と違うのは、大縮尺の図面でも線として見えること」と語る神保さん。現在、新潟県と富山県を結ぶ全長102kmの天然ガスのパイプライン（通称・富山ライン）建設事業所長を務めており、ルー



JIMBO Kazunori

1952年、山口県生まれ。東海大学海洋学部卒業後、1975年に旧帝国石油入社。削井事業所に配属、1995年以降は新東京、入間、静岡、新青海などの建設工事所長を歴任。現在は富山建設事業所長。60歳。

トの計画や工費の積算、関係各所との調整、現場の監督管理までを担う発注側の立場にある。われわれは神保さんの案内で、掘削中の山岳トンネル内の先端にあたる「切羽」まで足を踏み入れた。発破直後であったため、岩石や土砂が地山から落ちることもある現場だが、パイプライン敷設後はトンネルを埋め戻す。現在、2014年末の完成に向け、各工区で工事が進む。

数百kmにも及ぶパイプライン事業の特徴は、数多くの官公庁や地区との協議が連続すること。富山ラインの場合、関係機関との協議は延べ1万回、地元説明会は延べ数百回にのぼる見込みだ。特に高圧で目に見えない天然ガスが流れるため、安全性を不安に思う地元への説明には、力を入れている。何度でも説明を行い、事業主体が一丸と

なって地元住民との対話を重ねる。この調整役を務めるのが、発注者である神保さんだ。この際、人との「和」を意識し、「三つの『わ』」を心がけておられるという。それは「人と会話をする『話』」、「人と仲良くする『輪』」、「仕事をやる上に必要な『和』」である。建設用地の取得交渉、敷設の許認可が難しいパイプライン事業では、この「三つの『わ』」による人との「和」を築くことが欠かせないという。確かに、取材で伺ったトンネルの現場でも、作業員の皆さんと親しく会話し、現場の状況を自分の目だけでなく会話からも把握されていた光景を思い出した。発注者として現場の管理を行う際も「わ」を実践し、仕事に活かす姿が印象的であった。

「学生の頃から自分の意見を常に持ち、周囲に発信してほしい」とメッセージをくださった神保さん。パイプラインという線をつなぐためには、人とのつながりを築くことから始める必要がある。パイプラインを目にすることは難しいが、一つひとつのつながりがパイプラインという線となり、日本のエネルギーを支えている。



写真2 神保所長（写真中央）